

2009年1月～

## 人間歯科学研究会報

人間歯科学研究会

〒567-0883 茨木市大手町 7-26

FAX 072-626-6519

E-mail [yoshihara@gold.ocn.ne.jp](mailto:yoshihara@gold.ocn.ne.jp)

---

### 若者の犯罪

吾らが歯科医院には、どの地方あるいは海外へ移転しても、年に一度は口腔健診に来院する人が多い。

遠方へ移転した人ほど、きっちり定期的に来院するので口腔環境は良好で歯科衛生指導や処置よりも歯科美容に時間をかけることになる。ゆったりとゆとりをもって **Brushing** や **Whitening**、そして **APF** ができるので、その間たくさん情報を伝えてくれる。海外からも帰ってくるので、世界は身近になる。勿論、世界地図を見ないと分からない国もけっこうある。二世の外国語はよく分かるので面白い。しかも二世たちは初日から楽しそうに、まるで祖父母にでも話すように家庭内のできごと話してくれるので親たちはヒヤヒヤものである。

いったい犯罪をおかす若者たちはどのような生活をおくってきたのだろうかとつくづく考えさせられる。おそらく歯科医院に通院することなく、**Brushing** や咬合指導など受けたことが無いのだろうと推測する。

強度の上顎前突や反対咬合で、暗い顔をしていた子どもが **Brushing** ができるようになり、CAM CAMトレーニングで咀嚼学習をすることによって得た光り輝く眼と歯と自信に満ちた顔を見ていると、犯罪をおかすことなど考える予知もない。

### 歯列や咬合の美しい形はどこに基準を置くか

教科書や参考書からはなかなか得られないテーマだが、ツタンカーメンの義理の母であるネフェルティティの顔を参考に、左右対称（シンメトリー）であることを基準にすると、顔写真と口腔咬合写真および顎咬合模型とパノラマx線フィルムがあれば、ノギスとコンパスそれから分度器、そして参考書から得られた数値を元に作った歯列弓図があれば、特異な例を除いてほとんどの症例を分析することができる。

歯列や咬合型の検査は比較的容易であるが、学習量や習慣性、成長発育の方向や未来性については数多く分析を試み、経験しないと予測を誤り、CAM CAMの使用時間や時期と矯正装置の要・不要や設計にまよいが生じる。

これらは、3歳から30歳まで継続的に観察してきた600例以上から得られた一つの仮定の結論である。

しかし、上記についてはあくまでも形態だけのことであって機能については10%程度の情報しか得られない。したがって、胎生期、出産、授乳、離乳そして断乳までの状況と、その後の食生活や習慣など全身発育と健康状態などの多くの情報をアンケートや問診で得たり、口唇圧、咬合力、咀嚼力などと発音習癖について歯科範囲内で記録をとる。これらが、身長、体重の発育曲線に沿っているかどうかを確認しなければならない。3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月の記録の積み重ねがあってはじめて発育と発達の予測がたつ。

上手にBrushingできないと、しっかり奥歯で噛みしめたり、すりつぶしたり味わったりすることができない。これらを学習して修得しているかどうかを歯科医師が判定する。いわゆる咬合指導は矯正装置を装着するよりも難しい。

## BrushingやCAM CAM学習が充分でないとうなるか

女性は結婚して子どもを生み、育てるという大きな仕事を持ち得ている。しかし小児期にBrushingと咀嚼の学習が充分でないと、むし歯や歯周病の予防や処置を受けても、出産後突然う蝕が多発したり、歯周病が発生し進行が早まったりすることがある。最も困るのが咬合型が大きく変化する可能性があることである。OJが大きくなったり、前歯部の叢生化が年齢的に早まるので老化が進んだように見えることもある。原因不明の開咬にはどのように指導し矯正すべきかに頭を悩ます。30年以上健全で、楽しい定期健診だったステージに暗幕がたれ下がる。この時点で、就学までもっと咀嚼学習をしておくべきだったと思ってもすでにおそい。チューイングマスターCAM CAMでも最早咀嚼力をマスターすることはできない。「後の祭り」と言わざるを得ない。顎関節音や、顎関節痛、そして開口障害へと進行すると、咬合調整やCAM CAMでの安静位咬合の時間を長くするだけでは回復しにくい。

Brushingの習得と咬合学習は小児期に時間をかけて指導すべき課題である。

